

2 話題提供の概要

① 「よく笑う子」は、何に笑っていたのか—国語科・生活科の 視点による、重 度・重複の子どもの実態把握の“見取り直し

静岡県立特別支援学校教諭

● 実態把握の課題

- 「よく笑う」「揺れが好き」など、教師の印象で子どもを語りがち。
- 印象ベースでは教科の学びにつながらない。

● 引き算の授業

- 音楽・装飾・ストーリーなどを排除し、「揺れ＋言葉」だけのシンプルな構成にすることで、子どもの反応の意味を焦点化できた。

● 気づき

- 「321」という言葉に対して、揺らす前から喜ぶ姿が見られた。
- → 言葉の予測性（見通し）を理解している可能性。
- 揺らす担当者を変えても同じ反応が出たため、教師個人ではなく言葉そのものを理解していると判断。

● 教科との関連

- 国語科：言葉の意味・事物との結びつき
- 生活科：やり取り・双方向性
- 自立活動：見通し・環境把握 → シンプルな授業にすることで、教科の視点で子どもの姿を捉え直せた。

<グループ協議における参加者の意見>

- S先生：教科の視点で子どもが見えにくくなる懸念はあるが、今回の実践は逆に解像度が上がっていた。地域差を踏まえた議論が必要。
- Y先生：教科化は「教科をやることが目的化する危険性」がある。実態→ニーズ→必要な力→教科で育てる力、という流れでカリキュラムを組むことが重要。
- N先生：資質・能力を理解すると授業が変わる。表面的な「絵本読み」「数遊び」から脱却できる。
- H先生：音楽でも「教師が楽しむ授業」になりがち。子どもが自ら関わるための価値づけが重要。
- F先生：体育でも言葉の枠組みが有効。「321スタート」で見通しが持てる。他教科の言葉の扱いを共有すると子どもの表現が広がる。